

令和5年度 第1回調布市不登校施策に係る検討委員会
会議録

日時：令和5年6月19日(月)
午前9時30分から午前11時まで
場所：教育会館301・302研修室
傍聴者0名

<出席委員>

松尾 直博	委員
山田 勝	委員
小林 達哉	委員
所 水奈	委員
伊藤 聖子	委員
坂口 昇平	委員
高橋 剛三	委員
福島 靖	委員
田村 俊明	委員
渡邊 桂子	委員
山崎 亜子	委員
坂本 祐樹	委員

<議 事>

- 1 開会
- 2 教育委員会あいさつ
- 3 調布市不登校施策に係る検討委員会及び委員について
- 4 委員長及び副委員長の選出について
- 5 報告及び協議
 - (1) 調布市における不登校施策の現状及び課題について
 - (2) 調布市立第七中学校はしうち教室(不登校特例校)の成果と課題について
 - (3) 「調布市不登校支援プラン」(仮称)の策定に向けて
- 6 閉会

<配布資料>

- 資料1 令和5年度調布市不登校施策に係る検討委員会委員一覧
- 資料2 調布市不登校施策に係る検討委員会要綱
- 資料3 調布市不登校施策に係る検討委員会の設置について
- 資料4 令和5年度調布市不登校施策に係る検討委員会の概要
- 資料5 不登校児童・生徒への支援の充実について
- 資料6 調布市立小・中学校における不登校児童・生徒への支援方針(平成31年1月)

資料7 調布市適応指導教室 太陽の子 入室案内

資料8 調布市立第七中学校 はしうち教室 入室案内

資料9 調布市教育委員会 不登校児童・生徒への訪問型支援「みらい」利用案内

資料10 調布市不登校児童生徒支援プロジェクト「SWITCH」案内

<会議録>

1 調布市不登校施策に係る検討委員会及び委員について

事務局から資料2・資料4をもとに説明

第1の設置 調布市における不登校児童・生徒支援のための施策等の課題を明らかにするとともに、その解決に向けた今後の方向性及び具体的な取組を検討するため、本検討委員会を置くこと

第2の所掌事項

1点目は、不登校に係る推進計画の策定の検討に関すること。

2点目は、不登校の現状の調査及び分析に関すること。

3点目は、不登校の解決に向けた取組に関すること。

4点目は、その他、必要な事項に関すること。

第3 検討委員会の委員は、教育長が依頼又は任命する委員をもって組織する。

第4の委員の任期 2年

第5の委員長及び副委員長 検討委員会に委員長及び副委員長を置き、委員の互選によって定めること。委員長は検討委員会を代表し、会議を総理すること。副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその職務を代理すること。

2 委員長及び副委員長の選出について

互選により、委員長 所 水奈、副委員長 山田 勝に決定。

3 報告及び協議

(1) 調布市における不登校施策の現状及び課題について

●事務局説明

事務局より資料5・6の説明が行われた。

●質疑、意見交換等

委員長 事務局からの説明について、意見・質問はあるか。

それぞれのお立場から、現状と課題について教えてください。

委員 資料10について、児童・生徒支援個別票、メンタルフレンド、テラコヤ・スイッチを行っている。

学校に行きづらい子どもの保護者の集いの企画・運営も行っている。

児童・生徒支援個別票は、各学校から教育委員会に個別票の提出があり、大学の助言が必要な場合には、メンバーからコメントを付けて返却をしている。

課題としては、大学研究室としてコメントするものと、学校内で検討していただくのが良い場合がある。背景情報が限定されているので、学校内でまず検討していただければと思う。不登校状態にある児童・生徒が増えている。学校の先生方の負担にならないように考えている。

メンタルフレンドは、大学生・大学院生が話し相手・遊び相手、勉強のサポートをする。メンタルフレンドの要請が多いが、時間・場所の関係や、性別のマッチングが難しい。大学生は女性の方が多い。男性のメンタルフレンドを希望したときにマッチングが難しい。少し待たせてしまう場合もある。

テラコヤ・スイッチは、小集団の活動。学習の時間と自由時間を設定しているが、今は、おしゃべりしたり遊んだりすることを求める児童・生徒が多い。昨年度から小学生高学年も対象に広げている。来た児童・生徒は楽しく自己表現をしていて、よい活動ができている。コロナを機に、小集団でも出てこられない、抵抗があるのか、中学生の参加が少ない状況になっている。

委員 不登校の児童・生徒が増加しており、課題として認識している。適応指導教室「太陽の子」は小学校4年生からが対象。昨年11月から訪問型支援「みらい」を立ち上げた。課題としては、小学校低学年の対応や、「太陽の子」にも通えない、中学校版の適応指導教室の開設が課題である。今後に向けて、令和7年度スクールソーシャルワーカーの全校配置に向けた対応が必要と考えている。

委員 「太陽の子」では現在13名、体験13名 合計26名入室している。毎日10名前後の子どもが登校。指導体制は、チーフコーディネーター(Co)、指導員、Co、スクールカウンセラー(SC)、心理士など毎日4~7名のスタッフが対応している。

大切にしていることは、「太陽の子」が子どもにとって安心できる居場所となることで、子ども理解を深めるために、毎日職員で振り返りをしている。

保護者、在籍校、関係機関との連携を密にしている。また、教育委員会ではイケア・ジャパン株式会社の家具の配置を進めている。今年度から、せんがわ劇場との連携が始まり、アート・コミュニケーション・ワークショップ(ACW)として年間18回指導している。子どもたちの自己表現力を高めたり、友達とのよりよい関係を作るための取組。6月12日に第一回目だったが、子どもの変容の姿が見られた。ゲームをしているだけなのに、演技をしているよう。エアでハイタッチ。無言なのに、コミュニケーションを取れているよう。新しいことに、見ていた子どもも、次は参加してみたいと。継続していくことで変容がみられている。

課題としては、学習につまずいている子どもが多いので、ここでエネルギーを溜めて学校に戻っていくこと、子どもにあった進路を考えていくことが課題。

委員 「みらい」では、「自らの将来の居場所」から命名。昨年11月から正式に開始。昨年4月から検討し、7月に手探り状態で学習教室の方をやってみた。夏休みの宿題をやって学校に行こうということで、13回で延べ31名の生徒が参加。9月、10月は、かみふだ学童クラブ、青少年交流館。1回の会場で1.8人の参加。実際に開設した11月からは、平均で2.2名の生徒が来ている。生徒の変化としては、参加が11月時点で11名、3月21名。5か月間で10名ほど増えている。中には連絡はしているけれど来られていないという状態。

訪問支援として、5名の生徒が関係している。昨年度からは、11月~3月で6名の生徒が関わっていて、だいたい月に1から2名。小学校は6名で、コンスタントに2回訪問している。中学校では家庭訪問を受け入れてもらえない現状もある。どうすれば受け入れてもらえるのか、計画をしていく。

今考えているのは、保護者同士の連携をつくっていききたい。昨年は保護者会という名前ではなく、サロンという名前で情報交換をしている。今年は体験活動を実施する中で、保護者同士が

情報交換する場も作っていったらと考えている。今年も夏休み、「太陽の子」の施設を借りて、夏休みの宿題を終わらせようという企画を考えている。

委員長 保護者とのネットワークを作るというのは、文科省のCOCOLOプランにもあり、「みらい」でやっていただけるのは、心強い。

委員 やはり中学3年生になると、受験という問題があり、モチベーションがあがり、家族の協力体制がとれたり、アプローチがかけやすい。不登校になって、自分の進路を考えている時期ではない子どもに、どのようにアプローチするか。基本はエネルギーを溜める。エネルギーを溜めつつ、人とかかわりをつくっていくために、一人一人にどんな課題があって、どのようにアセスメントをしていくかが課題。

委員 テラコヤ、メンタルフレンドもそうだが、子どもたちのエネルギーを高めていく。さまざまな課題がある家庭もあり、スクールソーシャルワーカーのケースとしてもある。子ども自身へのアプローチだけでなく、子どもが落ち着いて生活できる家庭状況にしていけないと難しい。子どもたちがエネルギーを高めていくための安心できる場を、スクールソーシャルワーカーが学校と一緒に協同して、どうアプローチしていくかが大事。

委員長 学校の教育、福祉というところで、連携をやっていかなければならないという部分が課題と挙がっている感じ。

委員 子ども家庭支援センターすこやかでは、あらゆる相談を総合的に受けている。最近の新規相談ケースの中で不登校に関する相談は、R3年度は9件だったが、R4年度は24件。今までにないくらい多い。コロナ明けかはわからない。一人当たり、不登校児童・生徒12名を抱えているケースワーカーもいる。継続して何年も関わっていく状況になっている。

部屋から一歩も出られない、なぜそうなっているのか自分自身でもわからない子もいる。子どもと会えない場合は、安全確認も含め、保護者に聞き取りを行うが、原因がわからず保護者も苦しんでいる。定期的に保護者の相談にのり、保護者の意向により学校や教育委員会と連絡している状況。

会えなくて状況が分からないケースについては、映画や塾に行っているときに、確認をとっている状況。

会うと保護者の方が1時間も2時間も話をする。その子だけでなく、家庭全体の相談として受けている。保護者のメンタルも安定させ、気長にやってみましょう、としないと、お母さんも耐えられないという方もいる。

委員長 教育以外、居場所もどうにかならないのか。保護者が非常に悩んでいる。対策の柱として考えていかなければならない。

委員 子ども若者総合支援事業ここあは社会福祉協議会が市から委託されてやっている総合相談事業。やっていることは、総合相談なので、子ども若者に関する相談で、はざまになっているケースが多い。筆頭になっているのが不登校。不登校から引きこもりにつながり、引きこもりが30代、40代の引きこもり相談が続いている印象がある。そういうケースを掘っていくと、はじまりが小中学校に行けていなかったということが多い。お子さんのエネルギーがたまっていかない背景に、発達障害の確率が高い。親側が理解できない、環境にも理解してもらえないので、学校に行くエネルギーがないけれど、親の理解がないので、家でもエネルギーを溜められない。ここあでは、教育の部門とは違って、発達や精神疾患にかかわる相談も結構来ている。

われわれは教育に戻していくという方針で進めている。子どもがどの資源を使ってもうまくいかない時に、ここあはどうかとつながることが多い。居場所事業もやっていて、高校生以上をサードプレイス的につくっている。気長にやっている。中学生の学習支援もやっている。中学校1～3年。1日20人。無料塾みたいな形で、大学生の有償ボランティアにはいってもらっている。週3回。多いとき30人。大学生も30人。学習支援の中でも不登校の子がいる。親御さんが不登校で学習が遅れるのが気になるということで、学校には行けないけれど、勉強はしたいと。われわれは社会福祉協議会ということで、地域連携をやっている。地域である子ども食堂だったり、常設で開放されている民間でやっている資源にもつながっていない子どもがいる。民間との連携をがっつりしていかなければ。しょっちゅう行かせてもらいたい。精神科に親御さんだけで相談しているケースも結構多い。クリニックの先生と定期的にケースについて相談している。当てはまらない相談になるとここあに相談がきている。

委員長 今、お話しいただいたことは6点に絞られるのかと思う。

- 1 子ども自身に対する支援をどうするのか。不登校の子どもたちが、次に進むエネルギーを溜めることが必要。それぞれでどのようにかかわっていくのか。
- 2 保護者への支援。保護者も苦しんでいる。その部分で、学校ができるのはどこまでなのか、福祉やすこやかでできるところはどこなのか。
- 3 横のつながり。学校、教育委員会、福祉、ここあ、社会福祉協議会との横のつながりをより強固にしていかなければならない。
- 4 さらに民間との連携が必要ではないか。子ども食堂など、不登校の子どもたちの居場所へつなげていけたら。
- 5 発達障害、精神疾患。医療との連携が必要ではないか。
- 6 将来引きこもりになる原因をたどると小学生から引き続いているケースが多い。縦の流れ、小学生、中学生の不登校を若者支援までどうつなげていかなければならないのか。本市もそうだが、様々な不登校支援事業を構築している。各学校でもステップルームなどを設置するなど工夫している。しかし、そのところだけで独立しているのではないか。その課題について、つなぐものを市としてどう打ち出していくのか。

義務教育終了後の不登校のお子さんについて気になっていたと思うが、元校長先生としてのお立場から学校としてはどうか。

委員 卒業するときに必ず聞くのは、「今度は学ぶ場がなくなってしまうがよいか、いずれ通信制学校、夜間学校も考えてみないと。そのあと、どうするか」という話をする。一番大事なのは、保護者が悩んでいて相談する場がない。昨年もうちの方に来て、生徒は訪問支援「みらい」の方に来るようになったけれど、母親の支援もするために、月に1回、担当者と一緒に面談をしている。継続的に面談することによって、母親もリラックスして情報交換できるようになってきている。だけど、インターネットで調べて、知らない情報も拾ってしまう。子どもにとって何が必要なのか、保護者との面談はやっていかなければならない。子どもたちも勉強した後に、コミュニケーションのためにゲームをして遊んでいるが、少しずつ学校に行き始めている子どもが増えてきている。6月に入って、今頃、保護者の方から相談が増えてきている。これから増えてくる。今いる子どもたちが「みらい」を卒業して行ってほしい。「苦しくなったらこっちへおいで」と言っている。いくらでも相談してあげる。居場所だけは残してあげたい。あとは、保護者から、学習

室で一緒にいるのが誰かがわからない、ゲームやっていると、名前がわからない、との話があった。そのため、わざと〇〇、と名前を呼んで声をかけている。これからの課題がどうかかわっていくのか見えないが、まだ眠っている不登校の子どもがたくさんいる。学校と連携して、少しでも広げていただけたらありがたい。スクールソーシャルワーカー、心理士とも連携しながら、どこにつなげていけばよいかと方向性を探っていく。

委員長 発達障害、精神障害について様々な話があった。特別支援学校の校長先生でもいらっしゃった立場からお話を伺いたい。発達障害、精神障害＝不登校とは思わないし、結びつけるものでもないと思うが、いかがか。

委員 発達に特性のある人には、学生時代に自分なりのやり方で点を取れてきていたが、社会に出ると新しい対応を求められるため、ギャップの生じてしまう人がいるので、手を差し伸べていくことが必要である。特別支援学校での進路開拓は、ただお願いしますでは仕事につながらず、その子に合った仕事を見つけて進路開拓をやってきた。日本の会社は全員にゼネラリストを求める傾向が強い。多民族国家のアメリカでは、結構分業がはっきりしている。発達の特性ある子ども達は、得意・不得意があるので、分業した方が経験上よいと感じる。例えていうと、デパートの店員さんがお客さんの対応だけでなく、商品を包むことにも時間を割いていたケースでは、発達障害の子が商品を包む作業を受け持てば、店員さんはその時間をお客さん対応に集中することができる。そこを特例子会社という形で一部を受け持つことで、障害のある人たちの社会参加が広がってきている。だから、専門的な仕事の在り方を広げていくことが、こういう子たちの社会参加の一つの手段だろうと考えている。私が主に就いたのは、知的障害の学校だが、そういう社会への働きかけや、子どもの方の仕事のやり方を見直して、進路を開拓してきた世代である。今までの日本は、学校も社会もゼネラリストを求める傾向が強かった。分業があっても良いし、専門にやっていくこともこれからはありだと思っている。

委員長 不登校は、だれにでも起こりうる。発達障害・精神障害、個性に応じた環境になっているのか。福祉もそう。その子一人一人に応じたものになっているかが課題。学校は学校のルールに子どもを固めようとしている。不登校の子どもたちの居場所があったり、小集団の学習があったり、個別の対応をしたりしているが、それぞれがそれぞれに対応していて、一人一人に合っているのか。

委員 そこが重要。最近、石川県の加賀市の教育ビジョンが注目されている。調布市でいうと教育プラン。かなり、不登校児童・生徒を意識したプラン。昨年国が出した資料をさらに分かりやすくしたもの。中学生でどの程度多様な子がいるのかというのを調べたところ、不登校傾向にある生徒が10%、発達の偏りがある生徒が数%、特異な才能がある子が1%、外国籍や日本語が堪能でない生徒が何%かいて、家に本がない生徒が6～7人いる。この中で、一律一斉授業は効果的ではない。自由進度学習とか、個別最適な学びにシフトしていくと出している。発達障害の子だけでなく、他の子も多様になっている。一律一斉授業だけでは苦しくなっている。横のつながりに関しても、個人情報保護の問題もあるし、保護者の気持ちがある。現在、調布市では不登校児童・生徒が200人いる。本当にサポートの入っている子はどのくらい。入っていない子はどのようにアクセスできていないのか。把握するとともに、横のつながりに生かしていくことが必要。200人というのが、どのくらいサポートが入っているのか。どうしてうまくつながっていないのか。洗い出していくと、小学生・中学生で、発達の偏り、不安症の子、不安の強

すぎる子へのサポートが難しい。学校に行けているけれど苦しみがある子の欠席が多くなると、通級の使用が難しくなる。欠席が多くなると、特別支援のサポートが受けられず、長期の休みにつながっていく。

200人の状況把握、先生方の負担にならないように進めていければ良い。

委員長 横のつながりの現状把握が必要。今後、本市の不登校支援プランをつくっていくにあたり、国が出している生徒指導提要では、発達支持的生徒指導がキーワードの一つとして示されている。未然にどうするのか。本市の不登校児童・生徒も多くなっている。学校がその子たちをどうとらえて、どう支援を返していくのか、学校だけでは、どことどうやってつなげていくのが難しい。また、それがこれからの課題とと思っている。

不登校支援のリーフレットを作成したところ、こういうものが欲しかったと学校から言われた。学校、教員がとらえて、どういう支援、どうつなげたらよいか。まずは、教育委員会が200人の子どもたちの実態を把握していく必要がある。

委員 これまでの私自身の活動をふり返ってみても、スクールソーシャルワーカーがかなり活用されている学校とまだまだの学校がある。スクールソーシャルワーカーの周知活動がそもそも不足しているのではないか。冒頭での個票のお話とか、どこの資源につなげていったらよいか、学校の中で、スクールソーシャルワーカーが入っていき、アセスメントしていくことが、すこやか、ここあにつなげていく上でのパイプになるのではないかと考えている。難しいお子さんが居た時に、「太陽の子」、「はしうち教室」、地域の居場所、発達障害、精神疾患、医療につなげていく。教員以外の視点を取り入れていることが重要。今後、スクールソーシャルワーカーの人員配置が大きな活動につながっていく。そもそも、30～40代の引きこもり。そもそも、不登校が起きないように。9年間の中で、どれだけ支援の手を入れていくのか。未然予防が必要。今後、スクールソーシャルワーカーが学校周知も含め、入っていける体制があると、子どもの支援につながっていく。

委員長 さまざまな意見を本市の支援方針、プランに反映していく。

(2) 調布市立第七中学校はしうち教室(不登校特例校)の成果と課題について

●説明

委員から「はしうち教室」の概要について、資料8をもとに説明。

●質疑、意見交換等

委員長 はしうち6年目。5年間の実績資料5 3つめの表の左側。「はしうち教室」の在籍生徒数が、25名⇒21名。今年13名。コロナの影響もあり、減ってきている。委員の話からすると、対象をどうしていくのか。小集団。回復期がどうなのか。本市としては、不登校特例校はあるが、教育支援センター自体はない。各学校はSSルーム、行政としてはないので、昨年度「みらい」を立ち上げて、ここという特定の場所はないが、訪問支援、別室支援等に対応しているところではある。この5年間を検証していきながら、どのように進めていけばよいか考えていく。

委員 不登校になるとはしうちかなという話がまず挙がっている。回復期だったらいいんじゃないか。回復期になると、学校で頑張ろう。低迷期でも面倒を見てもらえるとありがたい。保護者に説明した時に、学校が変わる(転校する)ことがデメリット。行けるのであれば、一回チャレンジしてみようかなという子もいる。子どもたちが体験して、帰ってきて感想も聞かないというのが現

状。はしうちをお願いしたら、はしうちで面倒見てもらおう。面倒見切れないという場合、どうする？というのが校長の悩みでもある。われわれのところへ話が来るのは、市立中学校、他県から、「はしうちがあるから七中に入りたい、七中に入れてくれ」という相談が学務課に入っている。そうではなく、実績を作って、はしうちが必要であれば希望するように。実際に、はしうちの知名度が上がり、市外から市内に戻ってきたときに要望がきている。

委員 はしうちに試しに行ってみたという相談が、多くはないが、ある。なかなか子どもの特性によって、どこに行っても合わなかった。行き場がなくなった後に、保護者が検索して探してみても、ここあにたどり着くケースはある。どこにも行けない子がここあには行けるかというところではない。子どもの前に保護者とか、家での関わりをしっかりと話し、どうやってつなげていくのか。相談の窓口をつくってほしい。なかなかぴったり合うことはない。もしかしたら、そういう子は地域の民間が合うかもしれない。いろいろな選択肢があるといい。

委員 不登校で問題なのは、何が原因かわからないお子さんが多く、保護者も分かっていない。私立に行っている子も多い。私立中学校で不登校になると、保護者は、せつかく入ったのだから、その何年間か行ったり行かなかったりで、ゲーム依存になったり、ネットトラブルになるケースがある。

小学校からの不登校になると、どこに行かせればよいのか。はしうちというより、低学年の段階での居場所がないということもある。

委員長 私立中、他県からの転校で、はしうちを選んでいくけれど、そもそも、「太陽の子」もそうだが、不登校施策そのものが、調布市立学校に在籍している子が対象。私立の子だと学校と連携がとれないからできないとなっていること自体どうか。七中にはしうちがあるから七中に行きたいというものの逆パターン。私立には通い続けたいが不登校の対応、居場所については、相談所にも相談が来ている。

話はそれてしまったが、はしうちなどの特例校を、国の方もどんどん増やしてほしいと考えている。特例校の在り方も考えていかなければならない。

委員 特例校の役割は、不登校状況にあるが特定の生徒なので、混乱期、低迷期のサポートをどうするのか。問題が重複している子は、こちらのサービスが受けられない。でも、家庭、発達上、精神疾患など、問題が重複している子のサポートが課題。市全体で考えていく必要がある。

(3) 「調布市不登校支援プラン」(仮称)の策定に向けて

●事務局説明

事務局より、資料3をもとに今後のプラン策定の進め方について説明。

●質疑、意見交換等

質疑・意見等なし。

以上